

# 話 し こ と ば 四 題

田 代 晃 二

## 秒 の 世 界

わたしが、京都から大阪へ通勤する京阪電車の特急は、20分ごとに出る。時報のある0分発車のときは、およそ40秒前からのブザーが鳴り終るや、放送に切りかえられ、△ポッポッポッポーン▽ギギクンと発車、まことにあざやかだ。

\*

プロ野球日本シリーズ優勝戦やつと七戦まで行って決ったが、それまで、△南海だー▽△いや阪神だー▽とにぎやかなことだった。

一九五七年十月四日、ソビエトは人工衛星第一号を軌道に乗せることに成功した。このニュースは世界中をゆさぶったが、アメリカでは、ちょうどワールド・シリーズ優勝戦のまっ最中。臨時ニュースは、さっそく場内にも伝えられたのだが、試合に興奮している観衆には、それがどんなに大へんなニュースか、すぐには反応を示さなかつたという。日本は、まだそれほどは思われないが、野球ファンがふえたことはたしかだ。こんなにふえたにもかかわらず、次のような質問を試みると、案外答が出ない。

△ピッチャーが投げた球を見きわめて、バットを振るまでの時間は何秒ぐらいか？▽

△打ったランナーが、一塁へ駆けこむまでに要する時間は？▽

△ホームランが外野席に入っているまでの時間は？▽

△犠牲フライは、どの辺まで遠く打ちあげれば成功するか？▽

われわれは、親の世代にくらべれば、科学的な目も開け、短かい時間にも敏感になったようだが、興味、関心は、まだ秒の世界までには到っていない。

△朝、とび起きて、急いで歯をみがき、ひげをそり、顔を洗う、めしをかきこむ、服を着る、さいふとタバコと定期をたしかめ、カバンを持って、靴をはく、玄関を出る、バスまたは電車に乗る、タクシーを拾う、まで最低何分までおかねばならぬか？▽

われわれの時間感覚は、せいぜいこんなところだろう。それもすくな目に見積る傾きがある。わたしの父が植物採集旅行に出かけるときにあわたしだったことを思い出す。このくせをわたしも尊重してひきついでいる。

さて、ピッチャーの球が、キャッチャーのミットにとどくまでの時間は、もちろん球速によつてちがうが、 $\frac{1}{3}$ 秒内外だ。バッターは、それより前に立つていて、しかも横から球を見きわめ、バットを振るか振らないかの動作に出なければならぬ。

いかに、舌のよく廻るアナウンサーでも、秒速15音節までだから△投げました√の△た√のときは、バッターは、打つ気ならもうバットを振っていないと間に合わない。したがつて、アナウンサーのほうも、言葉を入れず△投げました打ちました√でなければならぬ。ところがバットに当たつたかどうか見極めるだけの時間のズレがあるの、△投げました・打ちました√となつて、言い終つたころはもう、三塁手あるいはいま投げたばかりのピッチャーのグラブにストリートで入っている、こともめづらしくない。

ラジオだけの時代は、多少ずれていてもすんだが、テレビ時代の今は、ずれたアナウンスは、映像が見えているだけにおかしい。そこで△投げた・打つた・ピッチャーゴロ、取つて一塁へ・アウト△といった簡略な言い方がふえてきた。さらには△つまつた当りでしたねえ√△あまりにも真正面すぎましたねえ√とゲームの進行の姿は映像にまかせてしまつて、批評・感想だけを解説者と交してかわす、といった手も使われる。さきの△投げた・打つた・ピッチャーゴロ……√は23音節に過ぎないが、間に確認のポーズが入るから、早口でも3秒弱かかる。足の速いランナーなら、3秒で一塁へ

駆けこむから、これを3秒以上かけてゆっくり言えるような場合なら、ランナーはすでに駆け抜けていてセーフ!

ホームランが外野席へ入るまでの時間は、上がる高さ、風に乗るかさからうか、また球場にもよるので、ずいぶん開きがあるが、4と6秒。したがつて、アナウンスも、そうあわてないですむ。

△投げました・打ちました・大きな当り・球はグングン伸びております・あつホームランになりそうです・ついにホームランになりました√

ホームランにならないまでも、センターがやつと追いつくぐらい奥へ犠牲フライを打ちあげると、とるまでに3と5秒かかるが、この球をホームまで3秒で送り返すことはまずできない。そこでランナーは、野手が捕るのを見とどけてからスタートしても、そして多少足のおそいランナーでも生還できる率が高い。

\*  
リレー衛星につづいて、シンコム衛星が打ちあげられ、オリンピックのテレビによる世界中継がはじめて実現した。今のところ、一方的な送像と受像であるが、そのうち相互のリレー中継も可能となる。テレビによる、各国首脳会議や学術その他の国際会議開催が夢ではなくなる日が来るだろう。

電波の速度は光に近く、秒速およそ30万キロ、一秒間に地球を七まわり半もするから、声をかけて返事を待つのに、じれったい思い

をする心配はいらない。ただ困るのは

△モシモシお早うございます！こちらは……▽

△ハイ今晚は！こちらは……▽

となる行きちがい・戸まどい。昨年の日米中継でも実感されたことだ。

天の川をへだて、25才のけん牛星が18才の織女星に向かつてウインクしても、それが彼女にとどくまでに16光年！織女星はすでに34才だ。彼女がニッコリ笑って返礼をとどけるのにこれまた16光年！ごあいさつがすんだ時は、けん牛星は57才、織女星はいくつでしょうか？

こんなことを考えると、まあ当分は、かぐや姫が帰って行った月の世界の、彼女の招きに応ずる日ぐらいを楽しみに待つべきだろう。月までの距離は、光の速度なら一秒、それこそまたたく間の近い親戚だ。ここでふたたび地上にもどり、ひと昔まえの、のんびりした話をつけ加えさせてもらおう。

\*

△外国にくらべ、日本は、時間の観念がなつちよらん、集会の時間が守られん、おとなどにも言うてもやっせん（役立たぬ）、おはんなちが（君たちが）おとなになるころは、時間をがっつい（正しく）守るようにせんければ、いっもはんど（いけませんぞ）ー▽

わたしが、鹿児島県加治木町の小学校四年から卒業までお世話に

なった飯島先生から、よく聞かされたことばだ。この先生は、物理学校に学んだかたで、当時としては珍らしく科学教育に熱心であった。いっぽう、ひる休みには、鈴木三重吉が出始めた童話雑誌△赤い鳥▽にいちはやく注目、その童話を読んで聞かせる斬らしい教育者でもあった。

そのころは、家にある時計といえは、一般にはすすけた柱時計か置時計がひとつ。そのほかに懐中時計をもっていたのは、駅長・郵便局長・町長・学校の先生などのクラス。この最後のクラスは持っていたりいなかったりだったが、わたしの父は、日曜や休暇ごとに植物採集のため汽車で出かける機会が多かったので、銀側のを大事に持っていた。茶だなの上には角型の置時計があったが、そのふしぎさを確かめたいと、母のする中にいたずらしていたら動かなくなってしまった。こっぴどく叱られた。八十才を越えた母は今こそ、子や孫に意見されたりしているが、そのころは威勢よく家に君臨、父よりも恐かった。この時計をなおしてもらうために、汽車で小一時間かかる鹿児島市へ母が買物をかねて持って行き、一週間後父が持って帰った。

時計のネジを巻くことを許され、それを目課のひとつに命じられたのはだいたいぶあとのことだが、巻くの忘れて止まったら、さあ大変！隣近所を聞き廻っても、止まったらままであったり、動いていても、二軒の聞き合せが、30分や60分ちがっていてもふしぎのない時

代だった。一時間ごとに、役場が時刻の数だけ鳴らしてくる八時の鐘Vを待っていないければならぬ。その日の風の吹きぐあいで、音は近かったり遠かったり、遊びほうけていれば、気がついた時はいくつ目であるか、あやふやなことだった。どうしても正確な時間が必要なときは、汽車の駅の待合室にある大時計を見に行って、走って帰ってきて合せる。途中で友だちに声をかけられ、立ちどまって応待したりしたら、おじやんになる。そんな時代だから、集会の時間を守れなど言ったって無理なわけでもあった。今も同じような呼びかけは続いているが、そのころにくらべれば、集会の模様もはるかによくなった。ご用聞きも配達もオートバイの時代だもの。

\*

日本の鉄道の発着時間だけは、欧米よりも正確で、これは世界に誇ってよいと聞かされたことがある。なぜ鉄道だけそうなのか？最近、朝日新聞夕刊に連載された「国鉄物語」で日本の鉄道史を読んでなっとくできた。狭軌を走る汽車、しかも日本の都市はほとんど海岸線に沿っている。明治以来、この都市をつなぐ鉄道の開発に力を入れるのが精いっぱい一般道路の開発はおくれた。いきおい客も貨物も列車に殺倒。本線・支線・特に本線は精いっぱい、いわゆる過密ダイヤVを組んでいる。発着を正確にしなければ、たちまちダイヤが狂って混乱するのだ。

東海道新幹線は試運転では時速二五六キロの記録を出すことに成

功している。一分間に4・4キロだから、もしオリンピックのマラソン42キロに出場するとしたら、スタートで多少出足がおそくてもすぐに先頭に立って10分とはかからないだろう。もともと、テープを切ったあと、止まるまでが大変だろうが。

\*

わたしの青春をささげた放送は、鉄道より歴史ははるかに浅く、半分にも満たないが、その普及はおどろくべきものだ。

今日、放送時間の正確さは誰しも認めるところだが、これも入番組の過密編成Vのせいだろうか？もともと初期のころは、ひろ間は放送しないアキ時間も多く、わたしの勤めはじめた戦争中までは、放送時間はさほど正確には守られなかった。

東京発の番組が予定より伸びれば、これに続く大阪発は、東京が終るまでいらいらしながら待つよりほかなかった。まぎわになって△3分のびそうだV、さらに追っかけて、△もつとのびるV、など主調整室への直通連絡電話がかかってくる。それだけこちらには、まぎわになってカットしなければならぬ。まだテープはなく、ナム番組の多い時代だった。あらかじめ万一にそなえてカットすべく心づもりしている部分を、大急ぎで棄団・出演者・技術など一同に連絡して廻る。なんと泣かされたか知れない。

戦後アメリカCIEのきびしい監督指導を受けた。番組の時刻・種目・対象を固定して、聴取者に、一週間の番組編成を印象づけ、

選択聴取の便をはかる。時間は絶対を守る。などが強制された。  
△落語・講談など日本伝統の語りものなど15分のワクではとてもやれない、例外を認めてもらいたい▽と陳情したが、△飯米で可能なことが、日本で不可能なはずはない▽と許されなかった。そこでやむなく、落語など、頭のマクラをこく短かく端折っていきなり本筋へ入る。途中もやや端折る、で、なんとか落ちまでもってゆくよう工夫してもらうことになったわけだ。

平和条約後、自主性を回復、不便な点は改め、日本の国情に合せて編成できるようになった。しかし、決められた時間を守り、次の番組を待つ聴取者や担当者に迷惑をかけない、という習慣だけは長所として残された。したがって以前のように、後継番組を担当する局のプロデューサーや技術者が泣かされることはなくなった。

しりみ しらずみ

かなで書くと、誤解されそうです。△知り見、知らず見▽のつもり。もちろん、辞書には出て来ない。真意は、あとでご賢察願いたい。

\*

わたしがK局にいたころの、10年以上むかしの話。放送部の部屋でわたしは自分の受け持ち番組のための原稿を書いていた。梅雨どきの午後。外は児童公園。書きつかれた手を休めようと、窓の外を見ると、さきほどまで駆け廻っていた子どもたちが、ひとりもい

い。小雨が降ってきたのだな、とうなづいているところへ、全中ニュースのあと、ローカルニュースを受けもったKアナの声が、モニタースピーカーから威勢よくとび出した。

△ふらずみのお天気でございますが……▽

わたしはびっくりした。わざとやったのかな？ それにしてもふざけすぎる……と思ったものの、待てよ、こちらがまちがって覚えたのかな？ さつそく、辞書を二冊ほど引いてみた。

〔降りみ降らずみ〕降ったり降らなかつたり。十六夜日記「一時雨も断えず」とある。やがて二階のスタジオからKアナが降りて部屋へ入ってきた。視線が合う。いつもの笑顔で至って平静。

△君、いまのふらずみ、わざとやったのかい？▽

△いいえ！▽

△田植の雨を待つ農家の気待を思っ、じょうだんを言ったのかと思っただが▽

△いけないんですか？▽

△いや、農家を思いやるのはいいとしても、ぼくたちは、ふらずみ、なんて習わなかった。字引を見てごらん▽

彼のすつとんきょうさには、しばしばなやまされもしたが、骨身を惜まず努力する、すなおな好青年だった。働きざかりを惜しいことに、昨年東京で、自分の運転していた車で、出勤途上の事故でなくなった。

△奮いたっていいですよ、もう時効ですから！それより、今夜、飲みに行きませんか？

K君の笑顔と言いたそうなことが目に浮かぶ。

つぎは、最近の、いまのわたしの仕事に関連あること。教育番組の台本が廻ってきた。

△みなさん、九月十五日は、どういう日ですか？

△ハイ、としよりの日です

△そうですね！

ここで、ちょっと引っかかった。潜在意識のどこかから「疑念あり」との信号がきた。さっそくキャンペン資料九月分の厚生省関係を拾う。あった！

「昨年の第十三回までは△としよりの日▽△としよりの福祉週間▽でやってきたが、地方からの強い要望もあり、ことしから△老人の日▽△老人の福祉週間▽に改められることとなった」とある。

外部のライターに依頼した原稿には、この種のミスはたえずありまた担当者も、いそがしさに追われて、知っていながら、あるいは知らずに、訂正されないままプリント室へ廻るおそれがある。そしてそのまま、われわれの「考査室」へ廻ってくる。

ミスを未然に防ぐ。誤りや好ましからぬ表現（ナレート・会話・映像）に気づけば、△検討してもらいたい・修正してもらいたい・

削除されたい▽など現場へアドバイスするために設けられている特別な部屋だ。一個人の主観で左右されてはならないから、明らかな誤りのほかは、問題点は、みんなで討議した結果を部屋の意見・見解として申入れるわけだ。個人の見解だけでいきなり申し入れることはない。だが、△査▽という字の連想からと、かつて部長・局長をしてきた年輩の人が多いので、こわがられている部屋だ。

M主査△Tさん、投書で問合せが来たんですがね、牧水の有名な歌で、「白玉の歯にしみとほる秋の夜は」というのがあってしょうあれの下の句「酒は静かに飲むべかりけり」と放送に出たが、あれは「飲むべかりける」が正しくはないか？というのが投書の趣旨なんです

T主査△わたしはけりだったと記憶します▽

M△やっぱりそうかな、けるのほうが味があるような気がする、けりですか？▽

H△わたしも、たしか、けりだったと思いますよ▽

T△それで、けりがついた！▽

で一同、大笑いとなった。けれども実は、そんな程度では、けりをつけない、念のため、あらためて調べ、確認するのがわれわれの習慣だ。わずかなことを調べるのにも大へんな時間を要することが少なくないが、マスコミの責任を思えば、当然のことだ。

こんなことを書いていて、「甲南国文」といういかめしい本誌の趣旨に添っているのかな？

いったい△国文△とは何ぞや？ 広辞苑を引いてみた。

① 一国の国語で綴った文章、またはその文学。くにぶみ。② 我が国語で綴った文章、またはその文学。③ 国文学の略。

最後の意味の△国文学△について引いてみると

① 自国の文学。② 我国の文学。またこれを研究する学問。

とある。その後、本誌の最近号や、他の大学で出している国文学誌に目を通してみた。大部分が、広辞苑のいう③のうちの、しかも、古典文学の研究が主流をなしている。

わたしの興味と研究は、△話しことば△を人間の内側から見ると

△言語活動△だ。研究の結果や観察の結果を、国語で綴れば、△文△

△国文△となる、にはちがいないが、さていかがなものか？

話しことばの研究そのものは△空気を加工し時間に乗せて流す記号と、その背後にある心理△の、待ったなしの世界の研究だ。だから、広辞苑の期待する国文、国文学の意味でならば、わたしの書いているようなものは、甲南国文の編集方針には合わないだろう。しかし、それは百も承知で依頼されたのであろうし、その後催促も受けた。

△メダカのとトトまじりり△のままよ、甲南は、くりぶりの文字で書こうなら△こうなん△だ。△こう「硬」△の方は、トトの先生がた

にお願ひして、メダカは△なん(軟)△で、トトの間をスイスイと泳がせてもらおう。ところでメダカは、目だけ大きく、体が軽いだけにトトの目のとどかぬところまで泳げたこともあるという話をしよう。拙著にぜひ入れたい資料のうち、出典を明示できないままに、どうしようか迷っている例があった。

◇馬も四つ足、鹿も四つ足、鹿の越えゆくこの坂道、馬の越えない道理はないと、大将義経まつ先に……。小学校唱歌で習ったもの。

◇大内裏の攻防戦で源氏に押しまくられ、六波羅へ逃げ帰っていた平の清盛。源氏の軍が鴨川の右岸へ攻め寄せてきた。あわててヨロイを着た。けらいが△おんカブトさかさまに候△と注意すると、清盛は△主上これにわたらせ給へば、敵のかたへ向はば、主上を後になしまいらせむがおそれなれば、さてカブトをばさかさまにきるぞかし△

心やすい、国文関係の三つの大学の先生方におたずねしたが、即答はなく△平家物語じゃないですか、わかっただらお知らせします△後答もないまま半年たった。ある大学の若い先生は、これしきのこと、なんのことやある、といさんで調べにかかったが、見当がすべではずれた。

△盲点をつかれた。調べがつくまでは、田代さんの行く飲み屋へは顔を出さない、と言い張って、いくら誘ってもついて来ないの

よ▽京都女子大の塚田助教からこの様な中間報告を聞かされて恐縮した。ことばの魔術の「言いくるめる」「言いのがれる」などの例として捨てるに惜しいので、岩波の古典全集の中で、うたがいをかけてよきそうなものはもちろん、ヒントを得られそうなものまで、手当り次第に目を通した。刑事の聞きこみ捜査みたいなものだ。本屋が届けるのを怠り、欠けているものがかかりあったので、これをやいやい言って探させ届けさせ、おおよそ揃えるのに三月もかかった。飲んで帰って、酔眼もうろうでも、習慣で、なにほどかいつも目を通した。あきらめかけていたとき、ついに後者を発見した。なんと、「平治物語、義朝六波羅に寄せらるる事」の中にあつた。それも、異本により、この部分があるのとないのとあることまでわかつた。

前者も、そのままの姿ではないが、源とおぼしきものにつきあつた。平家物語巻九、「老馬」の終のほうと、「坂落」の中ほどにあるものとを合せて作詞したもののようなのだ。

言語活動の目から、古典に出てくる話しことばを再検討することもあるかろうと思うが、その方面の研究にはなかなかお目にかかれないのが残念だ。

小生の誕誕の日は、前期に因しては、△降りみ降らずみ▽の日が多く、学生諸君も、授業始めのあいさつを、△よいお天気でございます

ます▽にすべきか？ △お願い致します▽にすべきか？ ます港のほうを見て、横顔のままあいさつする日が多かった。

本誌は、学生諸君もふくめての会誌のようだから、あえて望む。知り見！ 知らず見！

知らねばもちろん、多少知っていてもうたがわしくば、辞典、事典、すなわち先人の失敗や苦心のあとに建てられた灯台に聞え！

#### 外来講師の戸惑い

毎年、第一講のときは、この教室でよいのかな？文字どうり△戸惑い▽しながら入る。

頭をさげて、学生の顔を見る。表情の変化はなくても、ノートを聞く学生がいれば、この教室らしいなと、自己紹介のうえ、講義に入っている。講義というより、△お願い▽から入る、と言ったほうが真相に近い。

△居眠りしていても、出ないよりましだから、出席しなさい。成績は、出席点とペーパーテスト。過半数出席していれば、まず落第点はありません。わたしも三高生時代に覚えのあることだが、代返はほんとうの友情、親切にはならない。代返してもらったあとのノートを正しく埋めるには、出席した以上の時間がかかる。また、まじめに出席している他の友を裏切ることにもなるから、頼んだり頼まれたりすべきではない▽



初夏のある日、威勢のいい返事が二方向からかち合った。確かめるうちに声が小さくなり、ついに消えて、大笑いとなったこともある。ただしこれは本校の例ではないから、ご安心ください。

△君たち、教えてほしいから、高い授業料を払って来てるんだらう、教師が頭をさげたら、せめて全額ぐらいたらどうだ？▽

学生たちは、ニガ笑いしていたが、終りの一札をして、黒板の方へ向いたら、△先生、消しときます▽と出てきた殊勝な？ 学生がいた。

でも、学生は敏感だ。こちらが準備不十分なところは、声の勢からするどく感じとる。とたんに私語がふえる。時間の終るころ、どこで打ち切ろうかな、もうすこし、と思っていると、機先を制して、エンピツをしまいかけるジェスチュアなどまことにあざやかだ。

△よいお天気でございます▽

△お願い致します▽

△ありがとうございます▽

どなたの発想かうかがっていないが、あいさつは人間関係をなめらかにする第一歩！本校のあいさつは、まことにさわやかでいい。

天気のおやふやな日は、いずれにしようかと迷うのだろう、窓から港へ向かってあいさつする学生もあり、動物園のオームを連想したこともあった。先礼！これは、教師のほうがかひねくれています

な。

△先生、暑い日が続きますが、お元気でですか？でも、先生の講義を思い出すと、ソツとして、急に涼しくなります。とても、きびしいですもの！▽

この夏、こんな暑中見舞をいただいて恐縮した。六甲山腹に新しく建てられた甲南女子大の校舎。山から吹きおろしの風が教室を吹き抜けるので、わたしには、七月に入っても、涼しいと感じられたほど。しかし、学生諸君には、わたしの講義のほうか、より涼しかったらしい。

△暑中お見舞申し上げます。小生就職試験にも敗れ、暗然たる気持です。アルバイトのため、前期の出席率がわるかったのですが、もし単位が不足しますと、いよいよ……なにとぞよろしくお願い致します。▽

京都御所に近く町なかの割には木も多いD大学だが、騒音と熱気は十分。こちらは、口と、ときおり黒板書きに手を動かすだけいいが、目と耳と手をたえず緊張していなければならず、その上に暑さをしのげねばならず、学生諸君はまさに△四重苦▽だとかわいそうにもなる。

さて、探点のところに、こんな葉書が舞いこむと、心がいたむ。そんな様子の父を見ていた、同じ大学二年の長男が言った。△気にしない、気にしない！▽。現代マスコミから学ぶ、若い諸君の流行語

は、こんな風にドライに使われているのかな？

### アクセントの根強さ

△先礼ですが、先生のお国は○△ではいらっしやいませんか？▽

△そうですね▽

△……のあたりでしょうか？▽

△いや、おどろきましたね、お話しし始めてからまだ30秒たつかたないかだと思いますが、むかしはともかく、近ごろそんなにいきなり当てられたことはありません。郷里を出てもう30年以上になります▽ある小学校長に初めてお目にかかったときのことだが、こんな風にびっくりされた経験がちよいちょいある。

わたしの父は福島県、母は熊本県、そしてわたしが生まれた土地は長崎。父の転任にしたがい、四才から鹿児島、十五才京都。植物学者であった父のお伴で、南は屋久島、北は仙台まで各地のことばに接した。さらに青年時代に東京・神奈川・愛媛にも暮らした。

わたしは、東と西のアクセントをもつ両親に育てられたわけだが、もちろん、母の影響と遊び友だちはじめその周囲の影響が大きいため、西型で育ったと云ってよいだろう。家では標準語らしきものを使われたので、外と内との、語いの使い分けにはなやまされ

た。

母方の法事で熊本県八代市へ行ったことがあった。親どうしの親

しい隣の子どもたちと接することになったが、一週間ばかりするうちに、相手のもの言いの意味や抑揚のくせもいくらかわかるようになった。そこで思い切ってまねてみたところ、はなはだ奇妙なもの言いとなり、顔がほてった。相手の兄弟たち、すかさずそのまねをして、腹をかかえて大笑いするのは弱った。

ふつうの人よりも、ことばのちがうことについての△つらさ▽と△おもしろさ▽と△ふしぎさ▽を、子どものときから体験させられて来たから、それだけ敏感になったことはたしかだ。

戦後まもないころ、放送依頼で京都大学へ桑原教授をおたずねしたところ、たしか京都出身であるはずの先生から、△そんなはずはありません▽といった風のアクセントを聞いて、おや？ と思つた。ハハア、桑原先生は、ついさきごろまで東北大学にいらしたからだな、とうなずけた。その後、半年あまりしてお会いしたときは、もう、ふるさとの△関西アクセントによる共通語！▽にもどっておられた。

交通・通信の発達で、他国人どうしが寄り合い話し合う機会がふえたこと、また放送や出版物の普及で、共通語を耳にし、目にする機会のふえた今日、地方語まる出しの話しかたはすくなくなくなりつつある。このころでは、生粋の京育ちの娘さんどうしでも、上級学校から、さらに社会に出るにつれて、共通語で話そうとする傾向が強くなってきた。

△東京語を母体とするものだけを標準語と呼ぶのはけしからぬ。つい百年前までは、京ことばこそ上方ことばすなわち標準語と仰がれていたのだ。京ことばを母体とするのも第二標準語として尊重すべきだ。京都で生まれた源氏物語を、語いや文法だけはやかましく吟味するくせに、朗読だけは関東アクセントで平気でやっている大先生がおられるが、いかがなものだろうか？▽

そんな意味のことを、京都大学の猪熊教授や、大阪市立大学の梅村忠夫さんからうかがったことがある。時代の流れは別として、こもつともなことだと思つた。それでも、御所近くの神職の家に生まれた猪熊教授や、西陣に生まれた梅棹さんが、放送で話されることばは、アクセントはともかく、すくなくとも語いは、京ことばではない、日本の共通語だ。猪熊教授からいただいた著書「日本の生活史」や、梅棹さんからいただいたカナタイプのお手紙も、京ことばでは書いてない。

語いとしては、地方語・共通語を場に応じて使い分けられる人が多くなつたのだが、アクセントだけは、生まれ育つた土地の、幼ない時になじんだものが根強くて、和服・洋服を気軽に使い分けるようにはゆかぬ。

△アクセントを勉強したいのですが、いい本はないでしょうか？▽

△NHKのアクセント辞典では、終止形のアクセントしか引けま

せん。終りに書いてある説明や、変化表を読んでもみましたが、さっぱりわかりません▽

話しことばについてようやく関心の高まってきた戦後、小・中学校の先生方から、こんな質問・訴えをたびたび受けて返答に困つた。こんなに要望されているのだから、そのうち先輩のアクセント学者が書いてくださるだろうと思つてしたが、いつこうに出ない。ある出版社が企画して、数名の学者に当つたが、いずれも自信がもてないからとことわられた。西型出身の学者は

△わたし自身のアクセントがあぶないから▽ 東型出身の学者は△苦勞しておほえたわけでないから、どんな風に書いたらよいかわからない。それに、東京育ちどうしても、年令、その他で、名詞についてはかなりのゆれがあるから▽

望まれる本でありながら、出ない理由がわかつてみると、わたしのような苦勞をしたものが試みるほかない、そんな気がしてきた。わたし自身の興味は、すでにことばの形をはなれて、人間の内側からことばの働きを見る方向へ進んでいたのだが、いやしくも出版するとなれば、「だいたいこんな法則です、こんな傾向です」ではすまされない。あいまいな点を追究し、先輩学者にもたずねた。おどろいたのは、わたしが疑問に思つていた点は、大部分、先輩も疑問をもつており、明答できなかったことだ。

苦しい思いをして、どうにかまとめあげたのが昭和二十八年。そ

れをテキストに使い、実際に教えてみてわかったことは、あまりこまかく文法的にみることや、例外的なもの、応用のすくない法則にまで及ぶことは、労多くして効果があらぬということだった。

法則をきれいに立てられる、形容詞や動詞からはじめる。まず、各単語が平板か起伏か、いずれの群に属するか？ そしてそれら二群が、活用形において、どのような微妙なちがいをもっているかをなつとくさせ、身につけさせる、それだけでもたいへんなことであることがわかった。

◇ ねむい ねむく ねむくは ねむければ ねむかった

(平板形容詞の活用による変化)

◇ さむい さむく さむくは さむければ さむかった

(起伏)

◇ 春は あたたかく 夏は あつい 夏は あつく

秋は すずしい 秋は すずしく 冬は さむい

冬は さむく 春は あたたかい

◇ 学校へ 行く 行つて 行つても 行つた

行つたか 行かない 行かない 行かないのか 行きたい

行きたいのか (平板動詞の活用による変化)

◇ 単位を 取る 取つて 取つても 取つた

取つたか 取らない 取りたい 取りたいか

(起伏)

外国語でもそうだが、動詞・形容詞の変化を覚えこむか、否かが、峠を越すか、越さぬかの境目になる。もつとも苦しいが、また楽しいところ。ところが多くの学生が、母国語だからとなめてかかつて、これを真剣にやらない。

△わかることが値打ちではない、身につける、寝言にまで出るようになることが値打だ。長年の習慣、たとえば、右手にハシ、左手にワンをもつ習慣を切りかえるようなものだ。ひとりで手がそう動くようになるには、大へんな努力と時間がある。また、君たちが今はすらすらと書く文字、「山」や「川」や「海」などでも、かつての小学校教室あるいは家の宿題で、ノートが黒くなるほど、同じ字をくりかえし書いてからだに覚えさせたはずだ。アクセントの勉強もまた同じだ。やる気なら、時間と努力を傾けてもらいたい。△こんなことを、学期はじめに口をすっぱくして言つておいても、期待にこたえてくれる者は20%あるかなしかに終る。

ある大学の老教授が、次のようにつぶやいたことがある。

△学生は、外国語のような、まったく新しい学課なら、身を入れて勉強しようというかまえないもなるが、これまでの延長みたいな学課には身を入れませんな！▽

アクセント教育に力を入れ、成功している県がひとつだけある。

それは鹿児島県だ。数年前のことだが、県の国語教育研究会から招かれて、三十数年ぶりに鹿児島を訪れて、おどろいた。わたしが育

ったころは、共通語を聞くことはできて、自分から話しかけることはできない状態だった。なつかしい鹿兒島語を聞きたいと思つて、着いた夜、さっそく、天文館通りあたりの飲み屋へ入ってみた。はじめは鹿兒島語で応待してくれども、こちらは悲しいかな、聞くことはできるが、もはやむかしのようには使えない。客を八よそのものVと見ると、たちまち共通語に切りかえてしまうのだ。

翌日の講習会でもおどろいた。京阪神の教師以上にきれいなアクセントで共通語を話す教師が多くいたことだ。

△先生、いかがですか？この二人の先生がたは、鹿兒島県を一步も離れたことのない先生がたですよ、先生の本だけで勉強したかたがたですV

懇談会の席上、世話役の、鹿兒島大学の養手教授は、わたしに焼酒をすすめながら、そう言つて、小学校教師と中学校教師を紹介した。

△鹿兒島語で育つた子どもが小学校で習う国語は、極端に言えば、語いとしては外国語を習うようなものです。それなら、アクセントも低学年のうちから正しいものを教えておくべきだ。教える先生に十分の力はないにしても、そんなことでためらつては、いつまでたつてもできないだろう、教師自身も共に学ぶつもりでやるべきだ、やろうじゃないか、県下の国語教育の先生方が、この考え方に賛成して立ち上つてくれたのです。そこでNHK鹿兒島放送局

の協力のもとに、アクセント習得をねらいとした学校向けローカル放送を、週一回、各学校が教師・児童ともども聞いて、そのあと放送テキストにしたがい練習していますV

さて話をもどるが、劇団や学校で教えてみた経験から、小さな複製はすてて、初歩的なミスをしなないための基本的な法則だけをたつきこむ。そういうねらいでテキストも簡略なものに改めた。

それでも、甲南女子大前期(同文三年)の講義後に感想を書かしてみたところ、

△一時間目は、風変わりなイカス先生だと思つたが、二時間目以後、アクセントの勉強に入つてからは、とてもきびしくいやだった。金曜日の空は灰色だったV

△きびしい講義だったが、過ぎてみると、大学らしい講義のひとつとして一生思い出に残ることだろうV

△いつ当てられるかと、ビクビク、緊張づくめだった。でも、自分が当るとき以外は楽しく笑いのたえない教室だったV

△はじめにあった一分間のスピーチ実習など、もつとやつてもらつたらよかつたと今にして思う。連想をゆたかに活発に、しゃれとユーモア、もの言いかまえ、説明と説得、暖かい魔術、冷たい魔術など、あとになつて、話しことばのおもしろさがわかつてきたV

△アクセントのテキストを開くことは、気が重い。けれど、夏休み中に、強制的に読まされた「言葉の使い方」(昭和39・7創元

社)だけは、楽しかった。教室での実習や講義がさらに詳しく述べられてあり、また各界の人のことばが、おもしろくかつ考えさせられる実例として、たくさん入れてある。電車の中で読んでいて思わず吹き出し、隣の人がのぞきこむということもあった。▽

△いまさら、言葉の使い方の勉強なんてと、学期始めに不服に思っていたことが、今ははずかしい。実社会のことばには、こんなに多くの問題があるのだな！ むずかしいものだな！ しかし最後は、心を養わなければ、実のないことばは松に書いたモチにひとしいのだな！ などわかった▽

△話下手とあきらめていた自分でも、人の話のうまさ、しゃれ、ユーモアなど聞いて、本に書いてあったあの手だな！ と分析して聞けるようになった。努力次第で、自分も、もつとましになれるのだと勇気づけられた思いがしている。▽

これらが、学生たちの感想の最大公約数だ。

わたし自身の興味も、実は、話しことばの△形の面▽よりも、△心の働きと関連した言語活動▽にあるのだが、後者のテキストがおくれたせいもあり、△金曜の空を灰色にした▽とは気の毒なことであった。